

## 博士論文の要約

博士論文題目：16世紀ブラジルにおけるトゥピ語によるキリスト教の宣教

氏名：植田 めぐ美

本論文は、16世紀ブラジルにおいて先住民言語のトゥピ語でなされたキリスト教の宣教を歴史学の方法により再構成することを目的とする。特に、「カライーバ (caraiíba)」という語彙に注目する。本来、この語彙は先住民の言い伝えに現れる人物や彼らが行う在来の儀式を指していた。先住民の儀式は宣教活動を担ったイエズス会から罪とみなされたが、宣教師が作成したトゥピ語の教理問答書では、「カライーバ」に「キリスト教徒」や「キリスト教的聖性」の意味が与えられ、「洗礼」や「聖水」などのキリスト教的表現が創られた。このように、「カライーバ」は非キリスト教的意味とキリスト教的意味を含む両義的な語彙となり、本論文では、なぜこのような両義性が生じたのかを明らかにしてゆく。

なお、本論文では、キリスト教の概念を先住民言語で表現する行為を「翻訳」としている。これは、単にある言語を他の言語に置き換えることではなく、先住民言語を「宣教の言語」として再創造してゆく過程をいう。この過程に関わった多様な人々の経験を検討することで、「翻訳」の複雑な様相を明らかにしてゆく。さらに、先行研究ではあまり扱われていない点として、先住民言語で表現されたキリスト教の概念に先住民がどのように対応したのかということも「翻訳」のプロセスの一部として検討する。そのために、先住民が独自にキリスト教を扱っていた事例を取り上げる。特に、ヨーロッパ人から「聖性 (santidade)」と呼ばれた先住民の抵抗運動に注目する。これは、先住民が在来の儀式にキリスト教の要素を混入させて植民地化やキリスト教化に抵抗した運動であった。ここに混入したキリスト教の要素がどのようにトゥピ語で表現され、なぜ先住民は在来の儀式に流用したのかを明らかにする。

本論文は、序論、第1章から第6章までの本論、結論で構成されている。

序論では、以上に示した本論文の目的に加え、ブラジル植民地期の先住民に関する民族学研究と歴史学研究を概観し、改善すべき点と参考にできる点を検討した。まず、20世紀において、一部の民族学者が先住民の文化・宗教のオリジナル性を再構成しようと試み、その際、史料の情報が記されたコンテキスト、及び、植民地体制やキリスト教の宣教が先住民にもたらしたインパクトを考慮に入れていないという問題点を指摘した。それに対し、1990年代以降のブラジル植民地史研究では、ロナルド・ヴァインファス、クリスチナ・ポンパ、シャルロット・カステルノウ・レストワルなどの研究にみられるように、先住民とヨーロッパ人が相互に影響を与え合った歴史的プロセスを検討する傾向となり、これは本論文にとって参考になる点とした。ただし、ブラジル植民地史・宣教史では、ほとんどの先行研究がヨーロッパ言語史料の検討を中心としている。先住民言語史料を検討したアドーネ・アニョ

リンなどもあるが、このような研究はまだ少ない。それに比べ、スペイン領アメリカ植民地史研究では、先住民言語史料を用いた研究が比較的進んでいる。その中でも、アラン・ダー斯顿、ウィリアム・ハンクス、ナンシー・ファリスは、先住民言語をキリスト教化のための言語に再創造する行為として、植民地期になされた「翻訳」を捉えている。また、先住民言語史料とヨーロッパ言語史料の検討を合わせて行い、「翻訳」のプロセスとその背景にある歴史のプロセスを関連付けるという研究方法を取っている。このように 2 つのアプローチを同時に行う研究は少なく、本論文ではこの方法を取り入れることで、植民地史や宣教史、さらにエスノヒストリーの発展に貢献することが期待される。なお、本論文では、歴史学の研究方法に基づき、16 世紀と 17 世紀初頭に作成された先住民言語史料とヨーロッパ言語史料を検討・分析している。史料に関しては、既刊史料に加え、在ローマイエズ会文書館で収集した手稿史料を活用した。

第 1 章「16 世紀ブラジルの歴史的背景」では、トゥピ語系先住民、ポルトガルによるブラジルの植民地化、イエズス会による宣教活動について述べた。1530 年代以降に本格化した植民地政策は、主として大西洋沿岸地域で行われた。そこには、言語・文化が類似したトゥピナンバやトゥピニキンといった先住民の集団が分散して暮らしていた。彼らの言語は、現在では「トゥピ語」として知られているが、史料には「ブラジル語 (língua brasileira)」と記されていることが多く、これが先住民とヨーロッパ人の仲介言語となった。先住民社会には、集団の生活維持を担う首長や、「カライモニャンガ (caraimonhangá)」という在来の儀式を先導するパジェという存在がいた。儀式において、パジェは先住民に向かって雄弁に語りかけながら、敵対する集団と戦争をするよう促した。戦争は、社会的地位の向上、時間的概念の創出、死生観に関連し、先住民にとって重要な慣習であった。1549 年に宣教活動を開始したイエズス会は、パジェが行う儀式や戦争を罪とみなし、先住民からこういった慣習を取り除くために「宣教村」というブラジル独自の施設を創り、そこに先住民を集めてキリスト教の教義を教えた。キリスト教化に加え、宣教村は先住民を自由労働者として植民者に提供する役割も担っていた。しかし、イエズス会が独占的に先住民の労働力提供を統制したので、植民者との軋轢が生じる原因となった。また、宣教村は宣教師が先住民言語を習得する効果的な場所とされた。

第 2 章「イエズス会による言語政策」では、書簡、報告書、目録、管区会議記録、巡察記録の検討から、イエズス会が行った言語政策の過程を再構成した。これには、宣教師による先住民言語習得の体制を確立する試みや、当時「リングア」と呼ばれていた通訳の育成が含まれていた。宣教活動初期のイエズス会は、ブラジルに長期滞在していた植民者、ブラジルで生まれ育ったポルトガル人やマメルッコに通訳を依存していた。しかし、彼らの中には、先住民の慣習に従って生活する者もおり、宣教師が先住民言語を習得する方針へと転換した。1550 年代には、イエズス会士ジョゼ・デ・アンシエッタがトゥピ語の文法書を作成した。しかし、ヨーロッパから派遣された会士がトゥピ語を十分に習得することは難しかった。ゆえに、ブラジル長期滞在者や現地で生まれ育った者に通訳や先住民言語による教理問答

書の作成を任せる状態が続き、彼らは「リングア」として宣教地で重視された。リングアは、トゥピ語で雄弁に語り先住民を説得する術を得ていた。しかし、これはパジェに備わった特徴でもあり、ブラジル長期滞在者や現地で生まれ育った者は、イエズス会に入会してからもこの特徴を維持したままリングアとして活動した。ゆえに、ローマのイエズス会本部は彼らを疑い、入会を拒否するよう命じた。宣教地に派遣された巡察使は、宣教地と本部の見解の不一致を調停しようとしたが、16世紀中に解決することはなく、宣教地では、リングアの特徴は会から排除されず、むしろ、先住民のキリスト教化には欠かせない要素として後継のリングアへ引き継がれていった。

第3章「トゥピ語の教理問答書とカテキズム」では、アンシエッタが作成した手稿のトゥピ語による教理問答書と、イエズス会士アントニオ・デ・アラウージョがこれに秘跡や典礼の手引きなどを加え、1618年に刊行された『ブラジル語でのカテキズム』を検討し、先住民への教理教育や司牧がどのような形式であり、先住民は宣教師に教えられたキリスト教の内容をどのように実践していたかについて述べた。まず、トゥピ語テキストとイエズス会の書簡や報告書を合わせて検討したことで、先住民へ教理教育が行われた場所や状況によっては、教理問答の形式が異なっていたことが示された。また、トリエント公会議では、宗教改革派に対抗する手段として煉獄の教義や秘跡の実践が重視され、これはブラジルにおける教理問答や典礼にも反映されていたが、それに関するトゥピ語テキストの内容部分を検討すると、以下の矛盾点が示された。第1に、翻訳の方法に統一性がなかった。第2に、手稿本にみられる「秘跡 (yande anga poçanongaba)」、「洗礼 (nhemongaraiba)」、「聖体拝領 (Tupã rara)」などの表現に借用された先住民の文化的要素が見直されることなく刊本にも継続して用いられていた。第3に、「菓 (poçanga)」のように、ヨーロッパ言語と先住民言語に共通する意味があるとみなされた語彙が、罪と秘跡の両方の表現に用いられていた。これらの翻訳にみられる矛盾は、次章以降で詳細に検討された。

第4章「トゥピ語によるキリスト教的概念の翻訳」では、イエズス会の翻訳行為について、主に2つの点を検討した。第1に、先行研究からメキシコやペルーの翻訳活動を確認し、それをブラジルの翻訳活動と比較することで、両者の間では翻訳の過程が異なっていたことを示した。メキシコやペルーでは、翻訳活動に在俗教会や異なる修道会といった多様な組織が関与し、組織間で翻訳についての問題提起や議論が生じたことで、先住民言語によるキリスト教的表現の見直しや修正がなされた。それに対し、ブラジルでは、翻訳活動に在俗教会やイエズス会以外の修道会が直接関与することがなく、ゆえに、見直しの問題提起や議論が展開せず、宣教活動初期に先住民の文化的要素から創られたキリスト教の表現が継続して使用されたことが明らかになった。第2に、重要かつ翻訳が困難であったキリスト教の概念がどのようにトゥピ語で表現され、それに先住民がどのように対応したのかを検討した。「信仰 (erobiára)」や「崇拝 (moeté または moabáeté)」の翻訳では、先住民にとって重要な慣習と関連する語彙からキリスト教の表現が創られたことで、先住民的意味とキリスト教的意味が即座に折り合わず、両義性が生じたことが明らかになった。また、キリス

ト教の「神」には、トゥピ語で雷や稲妻を指す「トゥパン (Tupã)」という語彙が借用され、先住民は本来パジェに求めていた健康や長寿を「トゥパン」に求めるようになった。これは、先住民の慣習とキリスト教の教義、さらに疫病や飢饉といった植民地の歴史的コンテクストが相互作用した上で先住民が「主の祈り」を解釈し、その結果、先住民による「主の祈り」の暗唱は、宣教師が意図していたキリスト教の信仰を促す目的よりも、先住民が現実で直面する問題を解決するためになされていたことが明らかになった。

第5章「カライーバを借用したキリスト教的表現」では、先住民の言い伝えに現れる人物やパジェが行う儀式と関連する意味を持つ「カライーバ」という語彙を取り上げ、なぜこの語彙に「キリスト教徒」の意味が与えられ、この語彙から創られた「洗礼」に先住民がどのような対応をしたかについて検討した。「カライーバ」は、先住民の言い伝えに現れる人物の総称であった。先住民は、ヨーロッパ人が生活に有用となる鉄製品をもたらしたので彼らを言い伝えの人物とみなし、「カライーバ」と呼んだ。ここから宣教師は「キリスト教徒」を表すために「カライーバ」を借用した。また、「洗礼」は字義通りには「自分自身をカライーバにさせること (nhemongaraiba)」と表現された。宣教師は、病気の治療を宣教戦略としていたので、洗礼で病気が治ると信じる先住民や、薬を指す「ポサンガ (poçanga)」と宣教師を呼ぶ先住民も現れた。他方、もともと病気の治療はパジェの特権行為であり、ゆえに「ポサンガ」はパジェと関連がある意味を含む語彙であった。宣教師は、翻訳において「ポサンガ」のキリスト教的意味と非キリスト教的意味を区別しようとした。しかし、翻訳の背景には、言語間の問題だけではなく、パジェと宣教師が互いの行為や言葉を利用しながら争ったという逆説的な行動があり、その結果として、「自分自身をカライーバにさせること」や「ポサンガ」に両義性が生じ、健康の回復を求めてパジェと宣教師の間を揺れ動く先住民の行動にも反映された。

第6章「カライモニャンガに生じた両義性」では、パジェが行う儀式「カライモニャンガ」にキリスト教の要素が流用された「聖性」という先住民の抵抗運動を取り上げた。この章では、異端審問の聴罪記録から「聖性」で流用されたキリスト教の要素を抽出し、それを、これまで検討してきたトゥピ語によるキリスト教的表現、先住民によるキリスト教の実践や対応と対照させ、両者がどのように関連しているのかを明らかにした。「カライモニャンガ」は、パジェがマラカというヒョウタンで作られた楽器を用いて先住民を歌い踊らせ、労働の否定、老いの若返り、戦争の奨励を語る儀式であり、宣教師からは罪とみなされた慣習であった。しかし、教理問答書では、在来の慣習を捨て洗礼を受けることで罪が赦されるというキリスト教の教義に従った過程が、「洗礼 (nhemongaraiba : 自分自身をカライーバにさせること)」によって「治る (môboeira : 過去の状態にする)」と表現され、罪である先住民の慣習をキリスト教的生き方に取り換えるという宣教師の意図とは逆に、在来の慣習に戻るという解釈を先住民に与えるような表現となっていた。ただし、「聖性」は、このような翻訳の矛盾が反映され、先住民が在来の慣習に戻ることが目的とした運動ではなかった。

「聖性」の中でも、1580年代にバイアの内陸地域で発生した「ジャグアリペの聖性」と

いう事例については、ヴァインファスの先駆的研究や、彼により編纂・刊行された異端審問の聴罪記録に記されているので、比較的多くの情報を得ることができる。「ジャグアリペの聖性」は、イエズス会の宣教村から逃亡した先住民が教皇と名乗り、「トゥパナス（偉大なトゥパン）」と呼ぶ石の聖像を崇め、洗礼の儀式を行い、先住民がヨーロッパ人の主人になることが語られた儀式であった。これらのキリスト教的要素の流用は、一方では、教理問答書または秘跡や典礼の手引きで指示されたやり方に従って、先住民が宣教村で繰り返していたキリスト教的実践が反映されていた。他方、トゥピ語によるキリスト教的概念の表現は、ヨーロッパ人の力の獲得を可能とするような解釈へと導いていた。特に、「カライーバ」は、先住民の言い伝え、在来の儀式、キリスト教的聖性の3つの領域に現れ、すべてに共通して「現状を変化または反転する力」を備えていた。つまり、「聖性」において先住民がキリスト教的要素を取り入れたのは、宣教村でのキリスト教の実践とトゥピ語によるキリスト教的表現の影響に加え、ヨーロッパ人と先住民の地位を反転させるために「カライーバ」に備わる力を得るためであった。

結論としては、以下の3点が導き出された。第1に、リングアはパジェの特徴を備え、先住民の慣習に関連する語彙や先住民の見解から生じた表現を教理問答書の翻訳に使用し、宣教師もパジェの行為と重なる病気の治療を宣教戦略にしていたなど、イエズス会の宣教自体が両義的であったことが示された。第2に、「カライーバ」は多様なコンテキストにおいて「現状を変化または反転する」という意味で現れたので、非キリスト教的領域とキリスト教的領域の境界が曖昧となり、両義性を帯びたことが示された。第3に、教理問答書では、キリスト教化の過程が先住民の慣習に戻るような表現となっていたが、植民地で先住民が置かれた状況に応じて「カライーバ」の「変化または反転する」目的や対象が変わったことが示された。

本論文では、ヨーロッパ言語史料に加え、トゥピ語史料を丁寧に検討・分析したことで、トゥピ語でキリスト教の表現が創作されたプロセスをより詳細に再構成することが達成された。また、特に第6章では、ヨーロッパ言語史料の検討だけでは示されない事が明らかとなり、先行研究との違いを示すことができた。さらに、トゥピ語テキストの史料としての価値や有効性を示すことができ、植民地史や宣教史、エスノヒストリーへの貢献が可能となった。